

弥 生 時 代

弥生時代は、今から2,300年前から1,700年前のほぼ600年間をいう。この時代は、大陸から稲作技術が伝えられ、米などの食料を生産する点で、縄文時代とは大きく異なっていた。

稲作技術は、縄文時代晩期の終わりにはすでに北九州地方へ伝えられていたが、やがてこれに金属器や機織りの技術などが流入し、弥生文化が生まれた。

この新しい文化は、急速に東に伝播し、東海地方西部で一旦留まるものの、中期にはこの山梨県にもつたえられた。

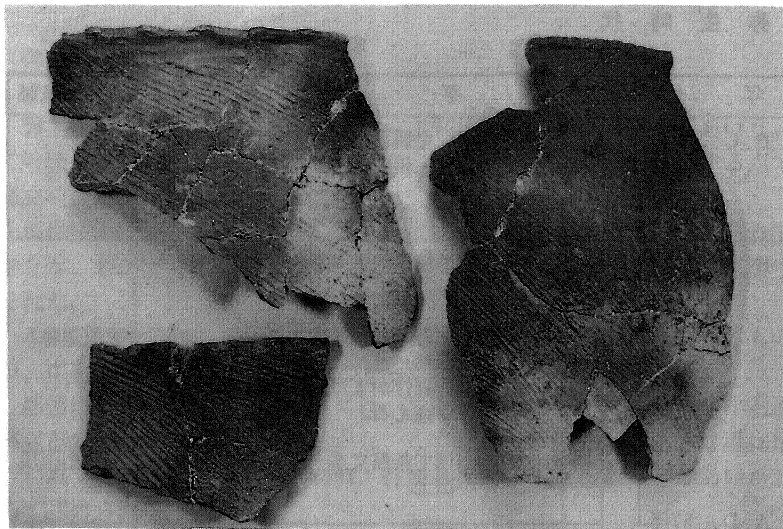
都留市でもこの弥生時代中期には、生出山山頂遺跡、宮原遺跡、牛石遺跡などの遺跡が認められる。しかし、この時期には、まだ本格的な稲作は行われていなかったものと思われ、打製石斧、磨石、石鏃などがあいかわらず認められる。

稲作が本格化する同時代後期になると、都留市内には遺跡が認められなくなる。これは、当地域内では簡単に水田化できる場所がなかったために、他の地域に移っていたものと思われる。

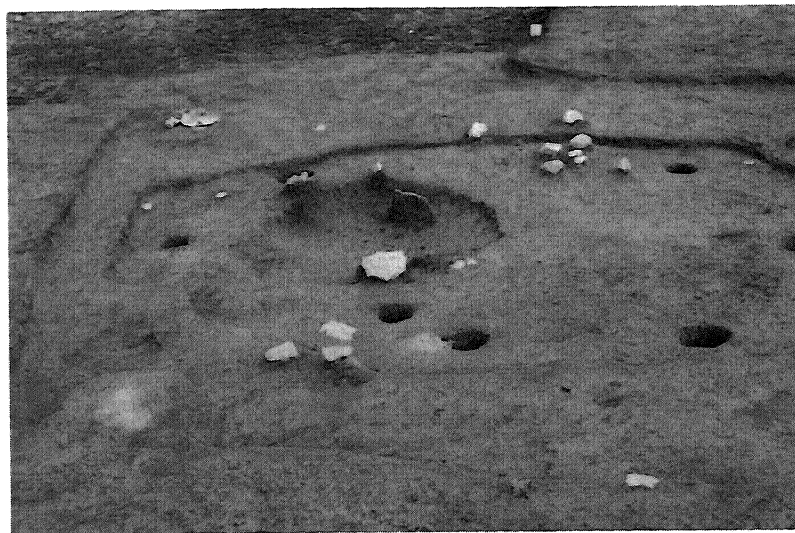
この都留市域に大規模な集落が営まれるようになった奈良時代までのおよそ600年間、当地域は人の余り住まない荒涼とした地域であったと推察される。

弥 生 時 代

年 代	時 期	事 項	市内の遺跡
B. C. 300年	前 期	水稻栽培、金属器を中心とする新しい弥生文化が北九州に広がる。 弥生文化は、急速に濃尾平野まで広がる。	
B C 100年	波 中 期	富士山麓や桂川流域にも弥生文化が伝わる。 宮原遺跡において、条痕文系土器（東海地方より伝播）と共に打製石斧や石鏃などが出土。稲作がまだ未成熟なものであったことが窺える。 生出山山頂で条痕文系土器と共に環状磨製石斧が出土。	宮原遺跡 生出山山頂遺跡
A. D. 57年	期	倭の奴国王が、後漢から金印を受ける。 国内で銅鐸や銅利器などが造られるようになる。 農耕技術が向上し、甲府盆地や曾根丘陵など各地に集落が営まれるようになる。 牛石遺跡で、住居跡3軒発見され、当地域内にも、集落が営まれるようになる。	牛石遺跡
A. D. 100年頃	後 期	この頃倭国大いに乱れ、百余国に分かれる。 曾根丘陵の上ノ平遺跡などに方形周溝墓が造られる。	
A. D. 239年	期	邪馬台国女王卑弥呼が、魏に使者を送り、親魏倭王の称号を受ける。	
A. D. 300年頃	古墳時代	曾根丘陵一帯に古墳群が形成されるようになる。	



弥生時代中期初頭の土器（宮原遺跡）



弥生時代中期の住居跡（牛石遺跡）

縄文晩期の土器群に代わって、稲作文化と共に伝播したのは東海地方の条痕文系の土器群であった。これらは、天竜川や木曽川をさかのぼって、長野県に伝わり、山梨県にもたらされた。

土器はかめ形土器を中心に、壺形土器などが認められる。土器に施された条痕文は、海に近い東海地方では二枚貝の腹縁を用いて施されるのに対して、ヘラ状やクシ状の工具によって施文されている。

弥生時代中期の土器
（牛石遺跡）

条痕文系土器に続いて普及した土器は、縄文が施され、また、ヘラなどで付けられた羽状の沈線文を特徴とするものであった。

この土器は、東海地方東部から伝わったものである。

